



michi



'26. 1

No. 92

世界救世教教義

そもそも、世界の創造主たる主の大神（エホバ）は、この地上に天国を樹立すべく、太初より経綸を行わせ給いつつあることを吾らは信ずるのである、これに対して人間を神の代行者とされ給うとともに、一切万有は人間のために造られたものである。故に今日までの人類史はそのための準備工作にほかならないことを信ずるのである。したがって、神はその時代時代に必要なる人間と、必要なる宗教を顕し給い、それぞれの使命を遂行させ給うのである。

いまや、世界の状勢は混沌として帰趨を知らず、この時に際し、主神は吾らの教主岡田自観師に救世の大任を下し給い、人類救済の聖業を達成せしめ給うを信ずるとともに、人類の三大災厄たる病貧争を根絶し、真善美の完き恒久平和の理想世界実現を目標として精進邁進せんことを期するものである。

（「救世」 53号 昭和25年3月11日）

令和8年実践計画書掲載み教え

令和8年信仰課題

魂磨き^{たまみが}

心清めて世を救ふ

尊き神業^{みわざ}に励^{いそ}しめよ皆^{みな}

【実践の誓い】

- 1 み教え拝読をさせていただきます。
- 2 参拝、浄霊、奉仕をさせていただきます。
- 3 明主様の救いを拡げていきます。

代表挨拶

西村 正資

皆さま、あけましておめでとうございます。新しい年、健やかに迎えのこととお慶び申し上げます。

二〇二六年は、「丙午^{ひのえうま}」の年。明主様は丙午の年のお生まれです。ご生誕一四四年目の年ということでもあります。

「丙」は、太陽のような明るさと燃える情熱。「午」は、駆け馬のような力強さとスピード感を表すのだそうです。人生の大半を農耕馬のように過ごしてきた私には、スピード感をもてと言われてもとても無理ですが、明るさと燃える情熱をもち、理想を携えて日々一歩一歩駄馬の如く歩むことに努めてまいりたいと心新たにしています。今年も、明主様から目を離さず、皆さまとともにスクラムを組んで、前進させていただきたいと切に願っております。どうぞよろしく願います。

新たな年の元旦、清新の気みなぎる快晴に恵まれ、熱海救世神殿にて執り行われた「新年祭・立教記念祭」にご参拝させていただきました。

明主様のご経綸が進捗し、世界の安寧と繁栄がはから

れ「明主様と聖地に直結する会」にご神業参加が許されますよう、お祈りさせていただきました。

ご参拝の中で、早速明主様を感じる大変感動的なことがあります。ご讃歌奉唱の時です。三首目のお歌でした。

魂磨き^{たまが} 心清めて世を救ふ^{こころぎよ} 尊き神業に励しめよ^よ皆^{みな}

このお歌は、「明主様と聖地に直結する会」が本年戴いた「信仰課題」と、同じお歌でした。

ご存知のように、明主様がお詠みになられ「祈りの栞」にも掲載されていますが、栞では「尊き神業に仕え励しめ」となっています。祈りの栞に掲載される段階で修辞されたものと推察いたしますが、原文の結句は「励しめよ皆」と、私たち信徒に、明主様が強く語りかけられているお歌となっています。

令和八年を迎えるにあたり、当会では信仰の初心に還る願いのもと、「明主様の想いを強くいただきたい」と、すべてのお歌の中から、このお歌一首を戴くことにいたしました。

救世神殿における祭典は、いづのめ教団が斎行されていますので、事前に当会との打ち合わせは、もちろんありませんが、祭典で奉唱されたお歌が、全く同じだったことには、驚きとともにご神意を感じた次第です。

これは、明主様から当会に「頼むぞ」と強い期待を寄

せられていることと受けとめ、心震える思いで奏上させていただきました。

皆さま、このお歌を繰り返し声を出して奉唱してみませんか。明主様がきつと眼前にお立ちくださることでしょう。そして、光と力と道筋をお与えくださるものと信じます。

私たちの一生は“くもりを減らし、徳積み”をするところが目的であり、魂の霊層界が向上し永遠に救われるための尊い一瞬一瞬であります。改めて明主様から私たちに“お前たちがまず徳を修め、救われてこそこの世も天国になるのだ。サア始めよ。一人一人が社会の一点になるのだ”と、お声をかけてくださっているようにも感じました。

今年、人生や命の原点を顧みて、ご縁をいただいた「世界救世教」の名に相応しい信仰をお捧げしていきたいものと、特に決意をいたしております。

“ありがとう”と周囲に感謝を捧げる生活も大切です。一方、周囲から満面の笑顔で“ありがとう”と返される生活も目指してまいりたいと思います。

身近な仲間のお蔭話や喜びの中には、自分に向けての尊い明主様の大愛とメッセージが添えられているように思います。今年もそのことに気付き、学び、私たちの成長の糧にさせていただきたいと願っています。

『道』一二月号 感謝奉告に学ぶ

山口グループのOTさんのご奉告です。

ご近所で懇意にしている方が体調を崩し入院されていることを知りました。また、別の知り合いの息子さんも大きな浄化をされたことも知りました。

しかし、高齢で免許も返納し、以前のように訪問することもできず、おそらく悶々としていらつしやつたのではないでしょうか。その気持ちを集会や先生との懇談の中で語り、“私に出来ることはないか”と考え、日々自宅での参拝や自己浄霊、祭典や集会で浄霊をいただく時、また、取り次ぐ時、浄化中の二人の知人の健康を祈り“ご一緒に”との想念を大切にされました。

奇^くびなり 鳴呼^あ奇^あびなり願^ね事^{ごと}の

正^{ただ}しかりせば叶^{かな}へますかも

その祈りが通じ、お二人の知人は、随分回復されました。

人は何事を行うにも、まず祈りから始めることが大切です。そこは、神様、明主様との直接の交流の場となります。OTさんは、すばらしい愛情をもって最高神にお二人をお繋ぎされました。今は、さまざまな制約があつて直接の行動に移れなくても霊的にはご縁が生まれていきますから、それはいつか結実し、形に現れることもある

のだと信じます。

祈りは、一見頼りなく思いますが、心からの誠をもち、礼を尽くして他人さまのことを祈るのは、神様もお力を表さずにはおられないでしょう。

この世の力の根源や神律を忘れず、今年も歩んでください。お祈りさせていただきます。

名古屋栄グループのFHさんのご奉告です。

職場での出来事がきっかけとなり、同僚の言葉や態度に、これまで経験したことのない苦しみや怒りを感じ、またそのこと自体も許せず、引きずる自分に嫌気がさし、苦しまれたようです。

長く大変でしたね。そうした中、先生や仲間からは「すべて明主様がなさっておられると信じる想念」「明主様のみ心の現れ」と、励まされたそうです。当初、なかなかそのように想念を切り替えることはできず、随分悩まれましたが、ある時仲間の感謝奉告で、交通事故の後遺症で苦しんでいた方が、その苦しみを素直に「すべて神様ですね」と受け入れたとたん「痛みが「スツ」と消えた」との奇蹟に強く心をひかれたそうです。この奉告を何度も何度も読み返す中で、ふと気付くと胸に長く残っていた苦しみが消えていたということでした。

誰も彼も 貴ぶ金剛石とても

磨かざりせば瓦なるらむ

すばらしい体験をされましたね。自分を変えられるのは自分しかいません。周囲から学ぶこと、それを実践してみることは、勇気と根気も必要ですが、その真摯な姿にこそ神様は感応してくださるのです。

瓦は、どんなに磨いても瓦ですから、Fさんは金剛石と認められたのですね。魂を覆う環境も随分変わったものと思います。

明主様は、天国建設にFさんが果たす役割をご期待されているものと思います。今回の学びと成長が、今後どのような結果をもたらすのか、楽しみにしています。

東大阪グループのTSさんのご奉告です。

Tさんは、定期的に、聖地にご参拝されています。神館、特に聖地に参拝させていただくことは、神様への畏敬の念を表し、日々の感謝をお捧げする尊いおつとめです。神様からは、世俗にもまれ疲れ果てた魂をお浄めいただき、英気と新たな使命を許されるということ、そこに参拝することは信仰の基本です。とは言え、本来の信仰を表すのは日々の生活の場であり、触れ合うすべての方々に生きる喜びを分かち合うための奉仕を忘れてはなりません。

Tさんは最近足の具合が良くなく、普段の生活でも、歩くことが少なくなっていたそうです。そんな中、“一〇月のご参拝、辞めておこうかな。次のご生誕祭も無理かもしれない”と、思ってしまったそうです。

そんな中でも一〇月の聖地参拝には、グループの方々と語り合い、前日から出かけられました。翌朝、身に付けていたはずの大切な金のネックレスがないことに気付きました。“どうしよう”と焦る中でも、同行の仲間に“迷惑がかかる”“私の良くない何かを神様が取ってくださった”“と思い直され、聖地参拝をされました。

一ヶ月後、浄霊センターでの感謝祭参拝後、帰宅。ふと、カード入れケースが気になり、開けたところ、そこからネックレスが出てきたそうです。泣きながら“ありがとうございます”と、ご神前で奉告され、その後“ご生誕祭の聖地参拝に行こう”“考えを改めるきっかけをいただいた”と、気付かれています。

主の神は 生きとし生けるもの悉に
生命を賜ひ幸を恵まふ

私たちは普段、生活の場に神様、明主様をお招きして、自分のお願いをすることが多くなります。このようなことばかりでは、どちらが上か下かと思うことはありませんか。Tさんは、とても大切な想念の切り替えに気

付されました。

祭典には、折り目筋目を正して、参拝することが、大切な順序礼節ではないでしょうか。その折には、ご先祖さまも同行されるそうです。

私もいつも、皆さまのご参拝のようすを感心して拝見させていただいています。

また、お待ちしております。

阿南グループのOAさんのご奉告です。

今年七月六、七日、グループで一泊二日の平安郷奉仕に参加され、帰宅すると在宅していた夫君に元気がなく、食欲もないことから病院で診察を受けました。結果「胃癌が見つかり肝臓に転移し、ステージ四」と、いきなり伝えられました。突然の宣告で、ショックも大きかったことでしょう。

その後入院し、抗癌剤治療を受けましたが、次第に動けなくなり、腹水が溜まり、手足のむくみもひどくなりました。先生やグループの方々が、ご祈願や浄霊に取り組みられました。

医師からは「緩和病棟に移りませんか。余命一ヶ月」と告げられました。そこでは、自由に浄霊をいただくことができ、奇蹟的に元気を取り戻し、医師の了解もあつて、自然農法産米のおにぎりを「美味しい」と喜んで食べることでできたそうです。私も病んだ時に食べた自然

米「おにぎり」の感動は、今も忘れません。

熱が下がり、酸素吸入や点滴も少なく、リハビリが可能となり、「退院に向けて準備しましょう」との判断で、自宅に帰ることになりました、

今では日常の最低限のことが可能になるまで回復されています。

永遠の 生命の幸を作れかし

此現世にありし間に

人の「命」は限りがあり「魂」は生き続けるものとみ教えいただいています。私たちは、命ある間に万物の主である神様を知り、真理に目覚めなければなりません。そうでなければ、いつか霊界に行きました時に、導きが得られず、真の平安は厳しくなります。

○家にとっては、今が一番大切な時ではないでしょうか。多くの皆さまの誠に包まれて、ご家族も心一つに歩まれているようですね。今の体験を大切に、今後も神様、明主様、そして先祖さまと一体であることを意識されて、み教え拝読を力に、ご家族一丸となり、ご夫君の養生専一に歩まれてください。

聖地でも、お祈りさせていただきます。

今年も皆さまのご奉告から、とても大切な信仰を学ば

せていただきました。感謝申し上げます。

ご挨拶の冒頭でも、少し触れましたが、今年の信仰課題は、新たな信仰の出発を意識し、明主様信仰の原点に還ることを意識しました。

み教えは『世界救世教教義』(当号掲載)

目標とするお歌は

『魂磨き 心清めて世を救ふ 尊き神業に励しめよ皆』

日々行動する指針は

- ①み教え拝読をさせていただきます。
- ②参拝、浄霊、奉仕をさせていただきます。
- ③明主様の救いを拡げていきます。

どうぞよろしくお願いいたします。

この後『立春祭』は、二月四日に執り行われます。

二月一〇日は『教祖祭』です。

まだまだ寒さが続きます。どうぞご自愛されつつ、一年の始まりを、大切にさせていただきます。

一年のご守護を振り返って

浜松布教所 MC

一月の感謝奉告祭で、村松先生より「感謝祭は一月の奉告と次月への決意をさせていただくことです」と指導され、「今年一年の奉告をさせていただこう」と思いました。

昨年の手首の骨折から病院の外来受付事務の仕事に出会い、日々楽しく充実した日を送っていました。

四月に配置換えがあり、皮膚科・泌尿器科・婦人科の担当になりました。皮膚科担当時、ドクターが私の手の爪に目を留め、「どうしたの？ちよっと見せて。あとでよく診るから」と言われました。

私は若い頃から病院では診てもらっていませんが、アトピー症状で、なかなか完治できていない状態でした。爪も人に見せるには躊躇するほどでした。（特に骨折後ひどくなりました）

ドクターによると、「アトピー性皮膚炎になる人ではない。爪はカンジダ菌という菌が原因で、薬を飲めば三ヶ月できれいになる」という診断でした。

「何十年も治らなかつたのに三ヶ月で治る？」薬を極力

入れてこなかった私は迷いましたが、日頃のドクターの診察姿勢に好感をもっていたので、「処方してください」と声に出していました。

主人に薬を服用することの了解とご浄霊の一層のお取り次ぎをお願いしました。ご浄霊と医療の二刀流です。一ヶ月毎に診察と血液検査を行い、二ヶ月経った時、肝臓の値が少し上がったので、薬の服用は通常より一ヶ月早く終了しました。ドクターからは「あとは自力で菌を押し出してね」と言われました。「あとはご浄霊で」と言われた気がしました。

一ヶ月後、血液検査結果は良好。爪の状態もすっかりきれいになりました。また、身体のかゆみ、ブツブツ、右耳のただれもすっかりなくなり、身体全体がきれいになりました。

四〇年以上、毒素を出させてもらっていると、病院にかからず、薬も飲まずにきました。それが今回は薬を飲んですっかり身体の表面がきれいになりました。「良かった。嬉しい。神様、明主様ありがとうございます」とポジティブに捉えています。

次に、病院に勤めている以上、感染対策でB型肝炎ウイルスのワクチン接種が義務付けられています。五月に一回接種後、倦怠感・吐き気・嘔吐二回の症状がでました。「このワクチンで副作用が出るのは稀」と内科医に言われましたが、そのお蔭で、二回目・三回目の接種を免

れることができました。

三つ目。四月からの配置換えで、パートナーも代わったのですが、Aさんとの人間関係がよろしくありませんでした。一ヶ月で仕事を辞めようと思ったほど、周りの人からも「Mさん大丈夫？」「まともにAさんの言うこと聞いちゃダメよ」と氣遣ってもらおうほどでした。「私ができないから怒られるんだから、できるようになればいいんだ。もう少し頑張ってみよう」と主人に愚痴を聞いてもらいながら続けました。

すると、一〇月末、皮膚科のドクターが「Aさんを担当から外してくれ！四月から七ヶ月間我慢してきたが、もう限界!!」と声をあげました。翌日から私が皮膚科担当として勤めています。この展開に私は驚き「奇蹟としか受けとめられない」と思いました。私が何も言わなくとも周りが私の良きように回っていた感じです。私は改めて、周りの人への思いやり、優しさ、謙虚さを忘れず心がけるようお願いさせました。

四つ目。九月中旬頃、主人が「あせもかな」と、皮膚の異常に気がつき、それがひどくなってきました。今まで体験したことのない状態に日々、驚きと不安、悩み苦しみを抱いています。どうか一日でも早く治りますよう、ご浄霊に取り組みさせていただいています。

中国上海駐在三年目に入って、日々多忙な長男と家族。

一二月一八日に五年間のメキシコ勤務から戻ってくる次男。九月に無事第二子・次女を許された三男家族は青森県おいらせ町に住んでいます。先日一二月八日夜中、震度六弱の地震でしたが、被害が全くなく、日常の生活を送れています。

昨年春、乳癌ステージ四と宣告された、四六年来の大親友Mさん。二ヶ月に一度は会い、ランチしておしゃべりして励まし合い、今年は一度だけご浄霊のお取り次ぎをさせていただきました。

新しい年もいろいろなことが起きることでしょう。『明主様にお気に入られているか。お役に立っているか』自分に問いかけながら、ご浄霊、み教え拝読を、生活リズムの中心において取り組ませていただきます。

昨年一年間、多くのご守護ありがとうございました。

感謝奉告

集会を通して不思議な体験

鈴鹿グループ S M

一一月の浄霊会を通して不思議な体験をいたしました。

鈴鹿グループとしてご神体ご奉斎家庭を中心に、家庭集会や浄霊会を充実していこうということで、この度、先

生と資格者のTさんをお迎えし、主人と私とで、四人の浄霊集会をさせていただきました。集会ではいろいろなことについて話し合いをさせていただきました。特に明主様に直結する営みについては、実践計画書にある、家庭信仰の充実について語り合いました。我が家では長男と長女が入信のお許しをいただいておりますが、信仰継承については、まだ課題がいろいろあります。しかし、長男は毎朝ご浄霊をいただいております。しかし、日々の日課・生活になっております。それでも長男は、「おひかり」を戴かないのです。そんな中で、今回集会をさせていただき、大きな「お蔭」をいただいたのです。

それは、集会が終わって皆さんが帰られ、四〇分ほどたった頃でした、ご神前の窓を開けて換気をしようと思つたところ、ご神前の襖のところ、自然と足が止まり身体が動かなくなつたのです。只々啞然とするばかりで、「どうしたんだろうか」と思っている内に、自分の頭の中心より薄いベールのようなものが、ゆっくり、ゆっくりと上にと上がってゆくというのか、抜けて行くのを感じ、身体が「スーッ」と軽くなつていくのです。そして、「フツ」と左手側を見ると、自分の上半身、頭の輪郭が透明の霊体とでもいうのでしょうか、それがハッキリと見えました。そしてその情景は、瞬く間に消えていきました。すると、何だか身体が「スーッ」と軽くなつてすっきりしたのです。自分でも説明できない一瞬の出

来事でした。

その状況を皆さんにお話ししますと、「この度の集会にお働きいただいた明主様より大きなお光をいただいたんですよ。その「お光」をいただかれたご先祖さまが喜ばれ、そしてS家の霊界を浄めていただき、同時に自分自身の曇りというか、覆い包まれていたベールを解き放つていただいたんじゃないですか!!」との感想をいただきました。

そして翌月、一二月の集会には長女が参加を許されました。「光の渦」によつて家族ぐるみへの信仰の向上が一步許されたと、改めて感謝申し上げます。

感謝奉告

世界人として生きるとは

鳴門グループ OK

私のテーマは「世界人として!」です。

和田先生に常々面談、質問をさせていただく度に、「OKさん、物事を大きく捉えて世界愛で受けとめてくださいね!」とお話いただいております。

私は、全くその意味が分からず、どうやって実践していけばいいのかわかりませんでした。とにかく想念だけ

でも定めていこうと浄化をいただいた時は、「これも明主様のみ心の現れですね！」そして「世界愛の始まりですね！」と定めて日々生活をしておりました。

そんな矢先、昨年末に私の大先輩である、Oさんより連絡をいただきました。Oさんは、著名人の企画編集や明主様信仰の団体の元役員で、その教団の学院建設など、私からみれば、雲の上のような存在の方で、明主様信仰で意気投合し、一〇年来のお付き合いをさせていただいております。

そのOさんより、「OKさん、先日、私は緊急搬送されました！」と聞かされ、「え？またどうされたのですか？」と聞きますと、「自宅で倒れ、精密検査したら肺癌があり脳にまで転移し、脳浮腫を起こしました」とのことでした。詳しく検査をすると、ステージ四の癌で、早くて年内、新薬を投薬しても来年の桜が見えるかどうかと余命宣告まで受けたそうです。

私は、「これはマズイ！」Oさんは、私にとってなくてはならない存在だし、地上天国建設にとっても絶対に必要な方！」と思い、なりふり構わずご祈願させていただきました。この時、財布にあったお金をすべて献金させていただきます。この後、秘書の方もおられたので、一〇日に一度くらいは近況報告してもらい、私も日々ご祈願していることを伝えました。

すると、Oさんよりまた連絡をいただき、この時、声

のトーンに元気がなく、嫌な予感がしました。しかし、開口一番、「OKさん、癌が完全になくなり、消滅しました」とのことでした。「え？Oさん？どういうことですか？」と聞き返すと、「いやいや、だからOKさん！癌がなくなつたのですよ！」「ええっ、本当ですか？私を安心させようと、そんなことを？」と聞き返しましたが、同じ返事でした。担当医の先生も、「まずこんなことはない！この新薬も一〇〇%効くものでもないし、ほとんどの方が副作用のため途中でやめて、そのまま亡くなる方が多いんですよ！Oさん、ノーベル賞もんですよ！」とのことでした。

そして、Oさんは確かに新薬のお蔭もあるかもしれませんが、「OKさん！あなたは、あなたの祈りのお蔭です！」OKさん！あなたは、私の命の恩人です！」と言っていたきました。私は、頭が真っ白になり、「こんなことがあるものか」と数日間何も手につきませんでした。

後日改めて、Oさんに癌になってから消滅するまでの経緯や治療方法などについて話していただきました。「余命わずかだったので、死ぬことに恐怖を感じず、かえって霊界へ還ることを決心できましたよ！」と言って終活をされていたそうです。「清々しい気持ちにもなりました！」とも言っていました。私はこの時、生に対する執着も一つの執着で、いかに執着が恐ろしいものかというみ教えを思い出し、改めてこの時、執着の恐ろしさを勉強させられました。

改めてこの度の流れを整理しますと、先生が常々言っている、世界人の片鱗を垣間見せていただいたと、明主様に感謝申し上げ、世界愛と定めることによって、仕事や家族など、以前と違った霊界になっているのだなど改めて気付かされました。

そして、ちょうどこの時、鳴門市長選があり出荷組合でお世話になっている、鳴門市議のHさんから連絡があり、「OKさん、この度の市長選に出馬しますので手伝って下さいね！」と報告を受けました。Hさんは、鳴門市議を四期、最年少議長として一六年、経歴としては、申し分ない方でした。私も選挙対策員として大役を与えられ、日々奔走してまいりました。

Hさんは、私が救世教の信仰をしていることも知っていますので、ご神前で参拝させていただき、開票日には鳴門グループの感謝奉告祭とも重なり、先生に先達していただき一緒に参拝しました。しかし、結果は惜しくも残念な結果となりました。私は、燃え尽き症候群みたいになり、何も手に付きませんでした。どうしたものかと悩みましたが、「ジツとしていましょうがない」と、出荷組合の仕事に取りかかりました。

そして一二月に入り、一二月号「道」がタイミングよく届きました。いつものように、体験発表を拝読していただきましたら、名古屋栄グループのFさんの体験発表が、私の胸に、深く、深く突き刺さりました。Fさんは、職場のこ

とで深く傷つき一年間も悩み苦しんだそうです。そして、九月号「道」に掲載された名古屋栄グループのTさんの体験発表で心打たれ、実践されたそうです。お二人の体験発表を、私も穴が開くくらい読ませていただきました。形はお二人とも違いますが、同じ痛み、浄化として共通しており、私もそれに倣おうと、自分の生活苦と照らし合わせました。そして、この度のお二人の体験発表を通して、先生より「OKさん！神様のご存在を認めることによって、苦しみの中にも希望を見出すことができ、また、神様はすべてをご存知であり、見通していらつしやいますよ！」と言われたことを思い出しました。信仰生活三〇数年やつと腹に落ちるようになってきました。

Oさんのご守護、Hさんの落選、一見相反するようない出来事が立て続けに起こりましたが、明主様は「善いことは無論結構だが、悪いことも浄化のためで、それが済めばよくなるに決っているから、ドツチへ転んでも結構なわけ、無病結構、病氣結構としたら、これこそ真の安心立命である」とおっしゃっておられます。私たちの身の回りに起きてくる事象や浄化を通して、明主様はご経綸を進めていらつしやいます。そして、このことを通して、同じように悩み苦しまされている方の救いにも私たちは使われ、知らず知らずに次の段階へと向上が許されていきます。

ここで以前の私と違う点は、このことをすべて明主様

がなされていることに気付かされました。もし、このことをすべて自分の思いの中にあると定めれば、堂々巡りになり再浄化の繰り返しになっていたかもしれません。でも「神を認め」「温かな想念」で受けとめれば、さらなる向上が許されるのではないかと思うようになりました。私たちは、もう昼の世界にいます。したがって、善悪正邪、喜怒哀楽の心の世界を超えた、魂の世界で生きる

と定めていかないと、さらなるお気付けをいただくかもしれませぬ。だから、世界人として生きていくチャンスが与えられているのではないかと思いました。

明主様は「本来信仰の理想とするところは常に安心の境地に在り、生活を楽しみ、歓喜に浸るといふのでなければならぬ。花鳥風月も、百鳥ももどりの声も、山水の美も、悉神みなが自分を慰めて下さるものであるように思われ、衣食住も深き恵みと感謝され、人間はもとより鳥獣虫魚草木の末に至るまで親しみを感じようになる。これが法悦の境地であつて何事も人事を尽くして後は神仏にお任せするといふ心境にならなければならぬのである」とみ教えくださっています。「悉神みなが自分を慰めて下さる」とありますが、私は、自分が神を奉るだけの存在と思つておりました。でも、このみ教えからいけば、もうすでに神は自分の中にあり、その自分を慰めるために、鳥獣虫魚草木があるのだと、全く真逆の想念があることに気付かされました。

以前、先生が「神様と私たちの関係をより深く知る上で、一つの例えですが、『自分』という字は『自らを分ける』と書きますが、『自(ら)』を分けるとはどういうことでしょうか。『自ら』を分けた存在が『私(己)』ということになりますか。『魂は神の分霊』であることを思います時、これは『自ら』こそが、神様なのだと思います。神様である『自ら』を分けられた存在が『私』であつたのだと思います。ですから、『自分』という字の本当の意味は、『神様から分けられた存在』ということではないでしょうか。だからこそ、神様と私たちは『同じ性質』であり、私たちは『光と愛』の存在だと自信をもって言えるのではないのでしょうか」とお話をくださったことを思い出しました。したがって「自分を否定すれば否定したような現象が起こり、肯定すれば肯定したような現象が起こるのではないか」と気付くことができました。「灯台下暗し」とは、まさにこのことです。こんな当たり前のことに気付かなかつた自分を責めました。そこに「世界人」として気付くための浄化があるのではないかと、前向きに捉えることができました。これが「魂の世界で生きる」という、さらなる向上ではないかと思ひました。

私は、まだまだ向上の余地がある信者です。これから明主様に見捨てられぬよう日々精進してまいります。そして、明主様に今年もお導きを賜りたいと存じます。

明主様ありがとうございました。

雲郷・京都平安郷の「初日の出」



水晶殿の円形窓に元旦のダイヤモンドリング



箱根神仙郷・観山亭から望む初日の出

令和8年 箱根神仙郷・熱海瑞



救世会館で迎える、相模湾上の旭日



京都平安郷に差し込む初日の旭光

御降誕祭(箱根)



12月23日、24日、光明神殿では立教90周年の御降誕祭を寿いだ。「光明会館の型」上棟をはじめ、三大事業が大きく前進した一年となった。また、教主制度の廃止など教規・規則の改正が認証され、明主様に帰一する新たな出発が許された。進みゆく経綸を事実として受けとめ、新文明創造への決意を新たにした。



御生誕祭(熱海)

12月23日、救世会館にて御生誕祭を斎行。多くの参拝者とともに明主様の御生誕を奉祝した。激動の一年を振り返りつつ、大神様・明主様のご守護のもと、日々があることに深い感謝を捧げた。あわせて、土の経綸として進められている京都の聖地平安郷建設の歩みを踏まえ、平安郷美術館建設を進めていく新たな段階が示された。



立教祭(箱根)

1月1日、光明神殿に於いて立教祭が執り行われた。新たな年を迎え、心からの感謝を捧げるとともに、箱根の聖地建設により新しい時代の扉が開かれ、明主様がお進めになる超宗教のご経緯について、新たな第一歩が刻まれることを確認。“心身ともに健康な人づくり、まちづくり、をスローガンに、文明の革新に奉仕する決意を新たにしました。



新年祭・立教記念祭(熱海)

1月1日、救世会館では、晴天のもと新年祭並びに立教記念祭を斎行。初日の出に新たな年の力強い門出を祝した。令和8年は丙午の年。勢いと成就の年であり、明主様の干支と重なる年でもある。平安郷美術館建設の意義が、海外から寄せられた声を通して紹介され、明主様に倣い利他愛を培い、さらにさらにご神業に励む決意を新たにしました。

明主様ご生誕地 東京・橋場

明主様の歩まれたご事蹟は、今もなお、私たち一人ひとりの心に語りかけてきます。

本シリーズでは、明主様ゆかりの地に刻まれた「みあと」を辿りながら、現地を紹介し、み教えの原点と、今を生きる私たち自身の信仰を静かに見つめ直してまいります。



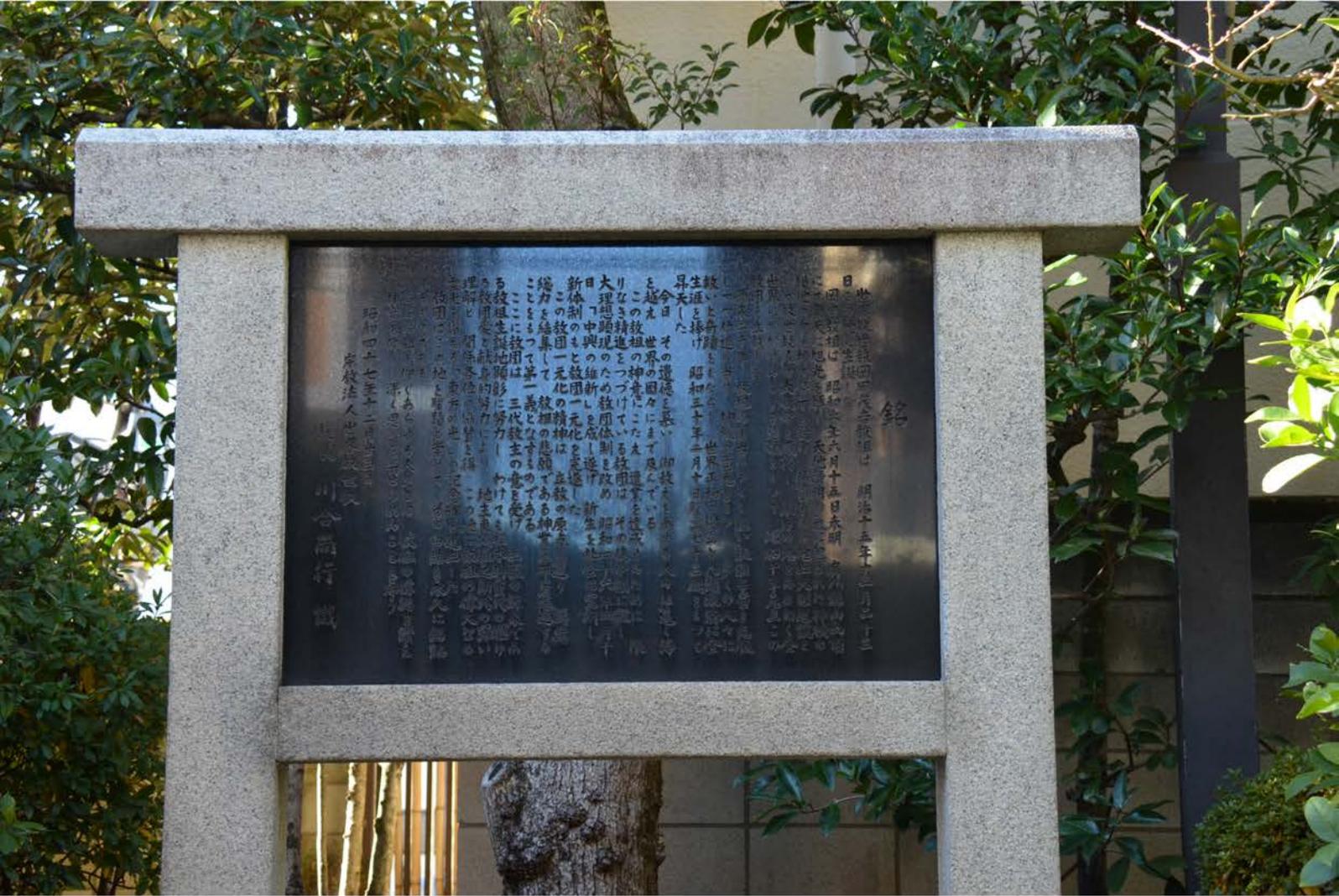
産湯の水がとられたと伝えられる井戸

明主様のご生誕地は、現在の東京都台東区橋場町です。

明治一五年一二月二三日、この地に古道具商を営む岡田喜三郎（父）、登里（母）の次男としてお生まれになり、六歳までをこの地で過ごされました。当時の橋場は、隅田川にほど近い下町情緒あふれる地域でした。

明主様は後年、当時の生活について、店は三疊ほど、居間は四疊半ほどの二間きりで、父は浅草公園へ夜店を出し、母は幼い自分を背負って荷車を押して通ったと回想されています。日々の糧にも事欠く暮らしの中で、母は栄養不足のため乳が出ず、近隣の寺院に乳をもらいに通ったことも記されています。また、明主様は、この地について、「日本という国はいうまでもなく地球の極東に当たり、かつ日本の東の都は東京であり、東京の東は浅草であり、浅草の東は前記の橋場町であるが、橋場から東は隅田川になっているから、まったくここは東のドン仕舞いで、世界全体からみても最東端である」と述べられています。こうした地理的な位置づけにも、後年のご神業との深い因縁を見ておられました。

この地は昭和四七年六月に世界救世教が入手し、同年一二月には「東方之光」と揮毫された明主様直筆の碑が建立されました。この碑には、立教に際して救世済民のみ心を託された詩「神は光にして光のあるところ平和と幸福と歓喜あり 無明暗黒には鬭争と欠乏と病あり 光と栄へを欲する者は来れ」が刻まれています。現在、ご生誕地は、都市の一角にありながら静かな佇まいが保たれています。



ご生誕地の由来と沿革が刻まれた由緒碑



隅田川沿いの地に佇む東方之光碑

み心とみ光に包まれて

東大阪グループ MS

一〇月一日、母が秋季大祭のご参拝を許されました。ありがとうございますございました。このことについて、感謝の思いと経緯を書かせていただきます。

母は一〇年前に、心配事などから睡眠障害が症状として出て、体調不良になりました。ただその際は、服薬通院にて一年ほどで体調が安定し、通院を続けながらも、家事、運動など日常生活に支障なく、体調が良好な状況で六年半が過ぎていました。

しかし、また三年半ほど前から、原因ははっきりしませんが、再度以前のように睡眠障害を含め、体調不良が見受けられるようになりました。母は父と二人暮らしで、父が母の通院など気にかけてサポートをしてくれています。母が体調を崩す波が増え、今回は最初の頃とは違い、なかなか好転せず、家族も心配するが増えています。

私自身も心配になって、秋季大祭から遡ることちょうど四ヶ月前の六月一日、母の状況を先生に相談し、ご祈願をお願いさせていただきました。そして、ありがたいことにすぐ聖地へ繋いでくださり、翌日に聖地にてご祈

願をしていただきました。改めて感謝申し上げます。

今までは心配な気持ちでしたが、聖地にてご祈願をしていただき、「扉が開いた」ような、目の前に「道」が拓けたような気持ちにさせていただきました。一番辛いのは母だと家族も理解し、ご浄化を受けとめ、母にとって良い方向に進むように祈りました。

母は、主之光教団にご縁をいただき、信仰を始めて約三〇年になります。この時点(去年六月)では、M教に所属しておりません。母が長く大切にしてきた、ご浄霊、お花、自然食などが数年間で大きく変化していったこと、また熱海への参拝ができなくなったことに、母は、「どうしてなのだろう」と困惑の中、体調不良を抱えながら、そのまま同じ場所へ、月に一度の参拝を続けてきました。

「今こそ母にはご浄霊が必要な状態であるのに」という気持ちの中で過ごしていましたが、私が母へ日々電話していることを先生にお伝えした際に、「毎日のお電話がある意味、ご浄霊をさせていたただいている」そう思ってみていただければと思います。が如何でしょうか」とお話くださいました。

ご浄霊のお取り次ぎについて、気持ちの内までは話していなかったのですが、びっくりしたのと、悩んでいたことにそっと触れていただいたような「温かい感覚」になりました。

母の症状をご報告させていただいてから二週間後、地

上天国祭へ、主人とともにご参拝が許されました。例年だと、この日は決まった仕事があり、ずっとご参拝ができませんでしたが、今回は仕事が別日程になりご参拝が叶いました。先日母のことをご祈願していただいたこと、ご守護いただいていることに感謝を申し上げ、母が聖地直結の会へご縁が許されることを、ご祈願させていただきます。

その後、母の体調のようすを見ながら過ごしているうちに、七月も後半になっていました。祖霊祭祀のことも気になっていたため、その話を聞くことと、入会のことを話してみようと思いました。その日は、朝起きてすぐ、「明主様」と声に出て、また私を信仰の道に導いてくれた亡き叔母を想いました。母に話す前に、「明主様、もし整っているようでしたら、お導きください」と祈り、私は言葉を選び緊張しながらも電話で母へ話すことができました。母も私が話すことをそのまま聞いてくれて八月に入会が許されました。また、気になっていた祖霊祭祀もお願ひすることができました。

そしてこの度、母が熱海での秋季大祭にご参拝が叶いましたが、それには母自身の気持ちも熱海のご参拝へ向くことも大切でしたが、物理的に母に同行してくれる人のサポートが必要でした。体調を考慮して前日から熱海へ入ることを考えると二日間になりますので、父に相談しますと、ありがたいことに仕事を休んで同行を快諾し

てくれました。心より感謝しています。

母の熱海へのご参拝は少なくとも数年ぶり……、一〇年ぶりだったかも知れません。私は、母が久しぶりに救世会館に入り、先生方とお会いできて、言葉をかけていただいている場面を目にし、涙が溢れてきました。また参拝席で母が声をしっかり出して、一生懸命お歌を挙げている姿に、私は大変嬉しく胸がいっぱいになりました。これは、四ヶ月前には全く想像できないことでした。そして、私も熱海へのご参拝ができますのは、夫の協力あつてのことと、秋季大祭に母のご参拝が許されるよう、後押しもしてくれたことに、心から感謝しています。

母の体調は今後も気にかけてまいります、心配しすぎず、「大丈夫かな……」ではなく、「大丈夫！」の気持ちで、日々過ごさせていただきます。

また、先生に教えていただきましたとおり、み教えの拝読やご浄霊の際、自分一人の時も、「家族など自分に関わる多くの方とともに」という「温かな想念」でさせていただきます。私もお実践したいと思えます。

明主様のみ心と聖地の温かなみ光に包まれて、この度は、目には見えないつながり、信じることの大切さ、さまざまなことが整って「道」が開いていくことを、改めて感じさせていただきました。

ありがとうございました。

救人一路 「一布教師として」

昭和の初期から、大本では、人類愛善運動、梅花運動ばいかという一連の思想改革運動に大きな力を注ぎ、個人的な苦悩よりも、むしろ社会全体の思想を改革して新たな世界を築こうとする方針をとっていた。したがって浄霊によって病を癒いし、悩める人々を救う道に全身全霊を打ち込んでいた教祖は、おのずから独自の道を極めていくこととなったのである。昭和六年(一九三二年)のころのある日、大本の思想運動の責任者が、「岡田さん、病気治しも結構だが、そればかりでは困る。運動の方にも、もっと力を入れてほしい。」

と、苦言を呈ていしたことがあった。すると教祖は、「それはわかっています。しかし、あちこちから頼まれるので、今は運動どころではない。それに、今、現実げんじつに苦しんでいる人を救うということは大事中の大事ではないですか。運動では直接人を救うことはできません。」

と答え、一歩も譲ゆずらなかつた。もちろん、当時大本の宣伝使の一人であった教祖は、思想運動を無視していたのではない。支部を回って講演をする中で、この運動について話をして

いるのである。したがって思想運動にも携たずわりながら、その中を身に降りかかる批判、非難を覚悟かくごのうえで浄霊による人助けにかけた教祖の情熱と意欲は、並々なみなみならないものがあつた。

昭和六年(一九三二年)の『日記』には、

御神業いよ／＼忙しく身も魂たまも

へと／＼になり疲れ果てけり

次々に病人来り目も開けぬ許ばかり忙しくなりにけるかな

と詠よんでいるほどである。

このころの教祖は、みずから信者の家をたずねて行ったり、あるいはやってきた信者と、時のたつのも忘れて話し合ったり、また、一人一人に浄霊を取り次いだりするというように、一人の布教師として、救世救人の神業に身を挺たしたのである。それはみずからの力徳を内に秘め、俗世間に身を投じるといふ「和光同塵わこうどうじん」の言葉そのままに、観音の教えを行ずる一信仰者の姿であつた。昭和四／＼六年(一九二九／三一年)の『日記』にはつぎのような歌が見出される。

五時間に亘わたりて説きし神業に胸はれ欣よろこび〇〇氏い去くも

風邪未だ治なおらず寒よき夜の街まちをあちらこちらに行くぞ苦しき

睡眠すいみんの不足ふそくの為ためか今日きょう一日いちにち流石りゅうせきに元氣げんき引き立ちかぬるも

昨日きのうよりの風邪ふうじゃの為ために心地こころ悪あしく鎮魂ちんこん多勢たせいに疲れつかはてけり

五、六人の信徒しんたく残りのこりて信徳しんとくの話わたりに徹夜てつやなしにけるかな

昭和七年（一九三二年）四月のことである。腹痛いふくを癒いされ、酒屋さかをやめて布教ふきょうの専従者せんじゆうとなつた飛弾友三ひだんともぞうは、以来大森の分院ぶんえんで奉仕ほうしをしていたが、能登のどにいるその甥おいが肺炎はいえんをこじらせて重態じゆうたいとの知らせを受け、浄霊じやうりやうに駆けつけて行つた。しかし、その容易りやういならぬ病状びやうじやうに、自分の力ちからに余ると感じて、東京へ帰ると、教祖きやうそに能登行のどぎやうを懇願こんがんした。教祖は、自分が行つて浄霊じやうりやうしても助かるまいと直感しよくかんしたが、甥おいを思う飛弾ひだんの愛情あいじやうにほだされ、能登のどへ行くことを承諾しょうだくし、四月八日午後八時、横浜よこはまから夜行やぎやうで能登のどへ向かつた。翌日あしたの午後二時半、七尾ななおの浅井宅あさいたくへ到着とちやく、三度にわたつて浄霊じやうりやうを施ほどこした結果けつこ快方かいほうに向かつたので、その夜の八時の夜行やぎやうで発たつて綾部あやべを経て、四月一二日帰京ききやうしたのである。しかし、それから二日後ふたごひのちの一四日の朝、容体ようたい悪化あくかの電報でんぱうが届とき、教祖きやうそはふたたび夜汽車よぎしやで往復おうふくした。

「初めて病児びやうこを見たとき死相ししやうを感じたが、一生懸命いしやうけんめい看病けんびやうしている家族かぞへにはどうしても氣きの毒どくでダメだといえなかつた。」

と後に飛弾ひだんに話わしたことであつたが、万ばんが一いちにも救われればという思いで、多忙たぼうの中なか、時間じかんをさいて二度までも遙はるか七尾ななおに足を運はんだのであつた。しかし、幼児ごうじは教祖きやうそが二度目に七尾ななおから帰かへつた翌日あしたに息いきを引き取とつてしまつた。この間のことが『日記』にはつぎのように記きされている。

米原まいばらに汽車きしや乗のかへて能登のどの国七尾くにななおへ午後ごごの二時半ふたごじはんに着つく

三回の鎮魂ちんこんに大おほいに快こころよくなりて両親りやうしん共々ともとも喜よろこぶ

病人びやうじんの病快びやうかいけれど衰弱はなはの甚はなはだしきをば心こころつかぬ

それから一か月ほどたつた五月ごごのなかばにも、教祖きやうそはまた交通かうたうの不便ふびんをかえりみず、千葉ちやへん県の片田舎かたいなかへ泊とまりがけで浄霊じやうりやうに出いかけている。それは麴町もろまちにいた信者しんじや・川越かわごへよしが、千葉ちやへん県けん夷隅郡いすみぐん東村あづまに住すむ義弟てんかん持もちの越河某こしかわを救すくつてもらいたいと願ねがつて来たからであつた。五月一四日の夕方ゆふた、両国りやうこく駅えきを發たち、夜の一〇時半ふたごじはんごろ、片田舎かたいなかの農家のうけである越河家こしかわへ着つくやさっそく浄霊じやうりやうを取り次つぎいだなのである。さらに翌朝あしたあさ起たきるとふたたび浄霊じやうりやうを取り次つぎぎ、その日のうちに帰京ききやうをして

午後十時半頃ごごじはんごころへんぴの百姓家ひやくしやうや越河方こしかたへ着つきにけるかな

越河氏方を十二時頃に発ち両国へ着し麴町へ行けり

「書画による救い」

昭和四、五年（一九二九、三〇年）ごろから教祖は、信者から請われるままに、書や絵の筆を執るようになった。当時中心となったものは観音像で、その大きさも色紙から大幅のものまでいろいろあり、神体やお守り、あるいは「おひねり」として信者に与えていた。

観音像のほか、天照大御神、釈迦、達磨なども画題になり、ときには山水、雪月花などを着彩で描くこともあった。

*和紙の薄片に、教祖が絵や文字を書き、それを折たたんで、丸薬のように服用した

教祖がこれらの画筆を揮ったのは、夜間の一時であった。そのころは後の時代に比べて訪れる人も少なく、書画のほかに短歌を詠むなど、大森の生活は経済的な逼迫にもかかわらず芸術に触れる機会の多いものであった。もちろん教祖は、単なる楽しみのために芸術にいそしんだものではなかった。書の揮毫も、絵や文字による救いをその本願とするものであった。救いの働きを担う観音像が揮毫の中心となったのも、そうした理由からである。

ことに、昭和六年（一九三一年）六月の天啓を受けてからは、浄霊とともに、画筆による活動も、教祖にとって重要な

神業の一つになった。そして大・中・小の画箋紙に本格的に描画するようになったのである。

このころの『日記』には、毎日浄霊を施した人、来訪した人の氏名が記録され、そのほかは観音像を描くために絵筆を執った記録が多い。昭和六年（一九三一年）六月二一日に、

珍しく今日の日曜閑散に観音尺三の幅を描けり

*横幅一尺三寸（約四〇センチメートル）の紙

七月二九日には

夜さりて観音画像を八枚の色紙にとりぐ描きけるかな

八月二八日の条には、

半折や色紙へ観音数枚を黄昏頃より描きけるかな

さらに、一〇月一三日には、

暴雨にて鎮魂少なく観音の大画像をば描きけるかな

とある。

次号に続く『東方之光』（上巻）より

新連載『神と繋がる明主様の食事観』

① 私たちの役割

(株)瑞雲 代表取締役 堀口照正

私は信仰家庭で育つたため、幸いなことに幼い頃から明主様の食事観にそつた食生活を営んでいました。平成八年に瑞雲に入社以降、自然食の流通や、またそれらを使った飲食店に従事いたしました。約三〇年、食に対する経験の中で強く感じることは、現在日本社会における自然食に対する関心が大きく高まってきていることです。

三〇年前の当時は、一般の食品流通で明主様が示された食事をするために必要な農産物や調味料などの食材は、手に入りづらい時代でした。私たちは自然農法を実施されている生産者に農産物を育てていただき、またそれらを原料として、明主様のみ教えを理解してくださる製造者へ持ち込み、商品にしていただきました。そしてその農産物や商品を明主様のみ教えを实践されようとされている信徒の皆さまへお届けするのが大きな役割でした。当時自然食を求めている方々というところ、私たちのような明主様信仰をしている者や、正食(マクロビオテック)の実施者、また自然保護運動をされている方々など、社会全体から観ると一部の少数市場でした。その中で私た

ちは、明主様信仰を求めている信徒を中心とした流通が中心であり、それが大きな役割でした。



そして歳月を経た現在、日本の環境は変わり国民の意識が高まり、社会から自然食が求められる時代へと大きく変化いたしました。国民の健康志向の高まりとともに、有機JAS法、有機農業推進法といった法制度は、自然農法、有機農法の生産者や流通への後押しと推進となりました。平成二五年の和食のユネスコ無形文化遺産登録は、日本人の伝統的な食文化である和食が世界から見直され、自然を尊重する精神や、多様な食材とその持ち味の尊重、そして健康的な栄養バランスといった特徴が改めて見直され、自然への回帰、地産地消、国産食材などとともに、その親和性が高い自然食への関心が一層高まりました。さらに令和三年に打ち出された「みどりの食料システム戦略」は、中長期にわたる国家戦略として「環境負荷の少ない食料システムを構築する」という枠組みの中、化学農薬や化学肥料の削減、有機農業の拡大を具体的な数値化目標を表し、農業者などへは、税制特

例や無利子融資、補助事業の優先採択などの支援措置を受ける制度も配備され、自然食にまつわる環境整備が進められ、環境は大きく変わっています。



私たちの生活においても、自然食品専門のスーパーマーケットが各地に生まれ、自然食と表した商品を置く店が目にとまります。インターネット通販の拡大で、消費者が自ら求める品質の商品を選択し手軽に入手できるようになりました。またユーチューブなどのSNSメディアでは、自然農法、自然栽培農家が動画を配信し高評価を受けています。また、薬の害を取り上げる医師や著名人が、食品添加物や農薬の危険性を堂々と訴えています。ネットメディアは、スポンサーなどの影響を受けないため、自らが信じていることを発言できます。正義感のある医師や科学者、専門家などが、病気と食べ物との因果関係を明確にし、農薬や添加物、薬の害を訴え、人体機能や近代栄養学の概念を正し、小麦や乳製品の必要性を訴え、日本人の身体に適した食材を推進するなど情報を発信しています。誤情報もありますので、私たちの情

報を取捨選択する知識が求められます。

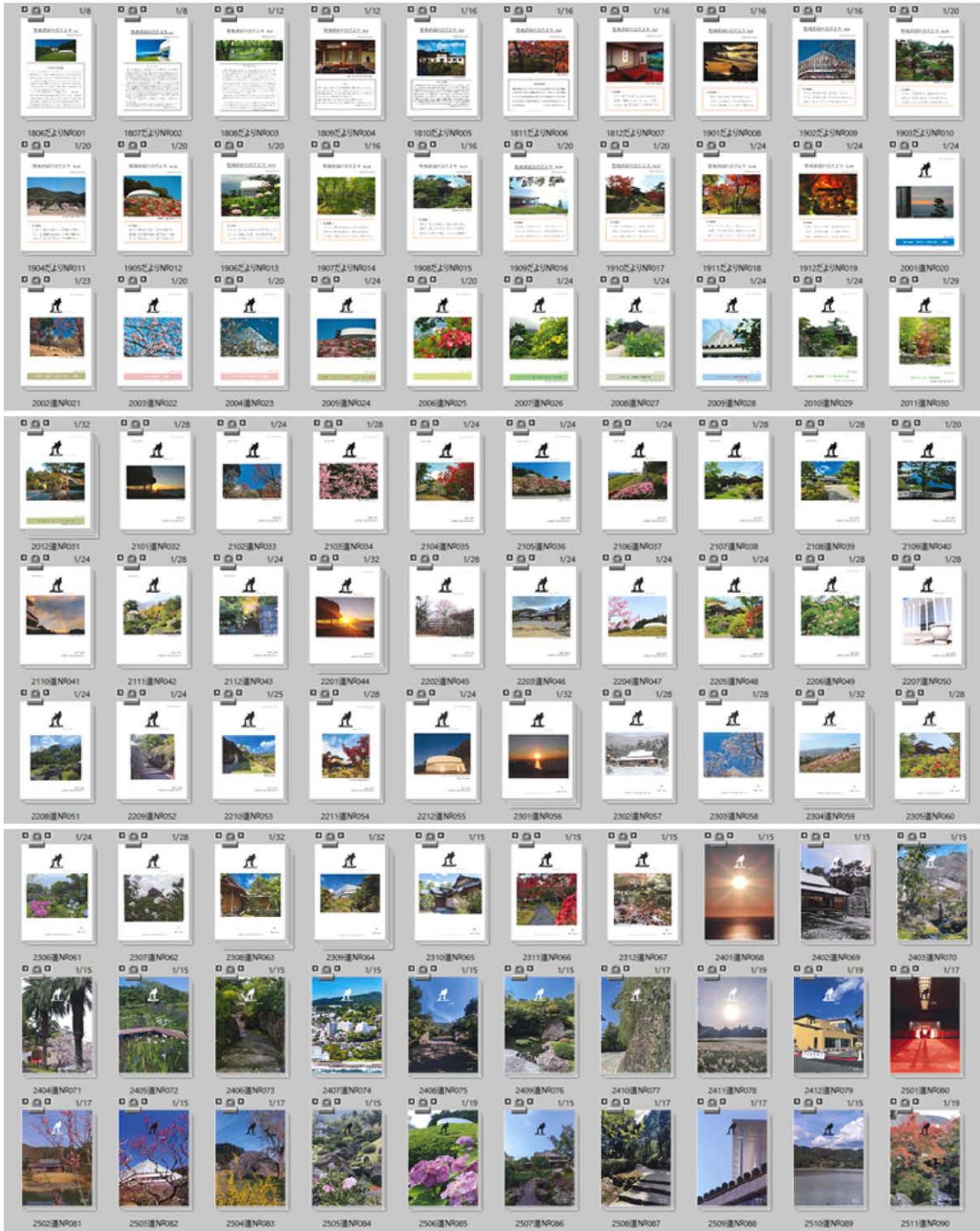
自然食の受けとめ方はさまざまですが、一部の少数市場から、大衆が求める市場として変化しつつあることは分かります。

今ここで、私たちは改めて、現代にそった、そして皆様のご経論上に合わせた役割使命を整理することが必要な時期が来たと受けとめさせていただいています。私たちは、「岡田茂吉の食事観」と題し、明主様に倣って、「食事とは何か」「食べることは何か」「人間の機能はどのようなものなのか」「人間は何を目的として生きているのか」という観点から、新たな学びが許されたいと願っております。



平安郷の門松

表紙でたどる「道」(2018年6月創刊)のあゆみ



2026年9月に100号となります



丙午

世界救世教 明主様と聖地に直結する会
(聖地直結の会)

〒413-0006

熱海市桃山町26-1 救世会館 1階

電話 0557 85 8060

FAX 0557 85 8185

seichicyokketsunokai@outlook.jp



No. 92 2026年1月15日発行

世界救世教 明主様と聖地に直結する会

